

日原憲之

赤い冬

詩人の仕草に慄いた夜、
脳みその回遊に尻尾が折れる

天気予報が雪だとしても
言葉のリズムにあやかりたい

右足のくるぶし辺りに脈の虫
悪くない人生だった

涙の粒の長い不在に
冬は足りてますか？
と、小さなつむじ風が
薬指の先の微かな温にそっと尋ねている